

林 洞海・研海

父と子の理念

望 月 洋 子

一九六九年ライデン・ハーグへ行き、文久二年の幕府遣欧留学生たちが学んだ跡を訪ねた。榎本武揚、赤松則良、西周、津田真道、林紀、内田正雄らが生活した下宿のあと、社交クラブ、古城、ハーグの森、スフェヴェニンゲンの海の家、大学などである。

ライデンでのシンポジウムのもと、パリで同宿となった奇縁で高橋邦太郎氏から、徳川昭武、林研海、M・カシオン、ゴーチエ父子等多くの史料を教えられた。

翌年の万国博ではオランダデイに招待されて、王室や随行のVIPと話し、また日本のオランダ関係者とも知り合う機会にめぐまれた。こうして大久保利謙・箭内健次・岩生成一・沼田次郎らの先生方から直接教えられ、ライデンやハーグの史料探索がはじまった。又佐藤・榎本・林・赤松家の皆さんから史料をいただき、同族会に招かれなどして好誼を得ることが続いた。「幕府和蘭留学関係史料集成」が出て後、資料を蒐集する旅がくり返され、オランダとのつながりは三十年に及んだといえる。日蘭友好三百年などの折に、求められるまま新聞や雑誌に発表してきたが、今回は林洞海・研海父子の理念を辿ってみようと思う。

(一)

林洞海は豊前小倉のひとつである。文化十年に生まれ天保五年（一八三四）江戸に出て足立長雋の塾でオランダ医学を修め、ここで佐藤泰然と知り合った。ともに長崎遊学を志し、小倉の洞海宅で落ちあい、長崎の小倉藩邸に着いた。長崎で大石良英らによる四年間の修業、江戸に戻って薬研堀での開業、常に洞海は兄弟子泰然と行動を共にした。¹⁾

洞海は泰然宅に寄宿すること五年、天保十四年（一八四三）泰然が佐倉に移住する時には、泰然長女つるをめぐり、薬研堀の医院と塾を譲られ、泰然次男の良順を預って蘭学を教えた。

洞海はファン・デル・ワートル（盗篤児）の「薬性論」を記述、三十部を謄写して上梓を申告した。また安政四年からお玉ヶ池種痘所設立に協力、天然痘撲滅と予防をめざすスタッフとなって活躍した。

安政五年七月、十三代將軍家定の危篤を機に、大老井伊直弼に召集され、奥医師に任じ法眼に叙せられた。洞海が奥医として江戸城に入った時期は、開府以来江戸城内の医術を司どった漢方医の多紀家の実権が揺らぎ、西洋医学禁止が解けた画期的な時期である。²⁾

洋医の力が認められる一因となったのは種痘の成功であろう。万延二年には種痘所が官立として公認され、大槻俊斉が頭取となり、文久元年十月「西洋医学所」と称することになった。取締に伊東玄朴、取締手伝に洞海が任命されたが、翌年大槻頭取が死去、伊東取締が差控となるなど、洞海はこの大切な時期を蘭方勢力を守るため活躍している。記録を見れば洞海が多忙さは歴然である。連日將軍および天璋院・本寿院らの健康管理に精勤し、休む暇なく出仕している。皇女和宮入興の前後も、幕府朝廷双方の対立に苦慮しつつ女性たちの保健に気をくばった。文久三年大坂から緒方洪庵を迎えるに当たっては、洞海が城内の習慣に従って付添い交替し介護した。洪庵の「勤仕向日記」はこの月日の詳細を物語る。³⁾ 八月の初出仕の日から翌年六年急死の日まで、洞海の柔軟な注意がうかがえるのである。

洞海には佐藤泰然娘つるとの間に、長男紀^{ツナ}、娘多津(榎本武揚妻)、てい(赤松則良妻)、紳六郎(西周養子)、ほかにサヨ(凶師民嘉妻)があり、文久二年には泰然の五男重三郎を養子として引き取っている。文久元年九月、洞海と研海は大槻俊斎から研海を長崎表へ医学修業に派遣する旨の通知をうけた。

この件はそれ以前の六月九日に遠藤但馬守から次の文面で、土圭^{とひい}の間にて「奥医師へ」として申し渡しがあつた。

一 御醫師倅共之儀、是迄之修行者父子相傳に而別に師匠相定修行仕候もの無之哉に相聞工候間、以来者ハ銘々見込次第醫學館種痘所へ罷出御定業前篤と研窮致し、隱居家督跡目相願候節倅共儀誰門人に而、何ヶ年醫業稽古仕候旨書出し候様可被致候。

一 漢科蘭科共、其家々規則相立居候處、其家相續致し候もの之性質に依り、漢科に而も蘭科に志有之間敷とも難申候。

左候得者銘々存意に不應業を修行致し候事故、自然家業怠り候様成行可申哉に付、向後漢科の家に而も蘭科相學び蘭科逆も漢科相學候儀不苦候間、勝手次第得手々々の職業専ら修行致し格別御用立候様可被致候。

それに関するものとして次の記録がある。⁽⁶⁾

奥御医師

玄朴養子

伊東 玄伯

同 洞海倅

林 研海

右者此度蘭科御醫師中子弟等之内有志之者一兩人長崎表之醫學為傳習被差遣、同所養生所之御用も可被仰付候間人物相撰名前申上候様被仰渡候に付取調仕候處右兩人之者共被差遣候様仕度此段申上候、以上

酉九月(文久元年九月五日)

大槻 俊 齋

文化元年十月九日、研海は伊東玄伯とともに江戸城躑躅の間へ伺向した。

ここで金二枚宛を下賜され、若年寄中出座の上、「長崎表江医学伝習に遣わされ候に付之を下さる」と申し渡された。

堀出雲守申し渡、上使永井肥前守
松平右近大將監

十月二十六日には人足と馬の手配を受け、老中安藤対馬守の朱印入り命令書を持って長崎へ向った。

長崎海軍伝習所では安政四年（一八五〇）九月に来日したポンペ（Pompe von Meerdervoort）（一八二九—一九〇八）が十一月から日本人に医学の講義をしていた。幕府が招いた海軍伝習の教官であるが、二十歳の若さでユトレヒト陸軍々医学校を卒業し東インド勤務を経て、日本に派遣された。ユトレヒトで受けた理論と知識を、そのまま化学、物理、生理学など基礎から学生にぶつけたことが、系統だった西洋近代医学教育となった。それ以前に来日したシーボルトの教育は時代の故もあって必ずしも組織的な教育とはいえなかったのである。養生所には、ポンペ第一の弟子であり助手でもある松本良順がいた（研海には叔父にあたり薬研堀の洞海宅で兄弟のように育った間柄だった）。日本最初の西洋式病院である小島養生所も一八六一年完成して、屋上に日の丸とオランダ国旗がひるがえっていた。患者は最初の一年で百人に及んでいた。

ポンペの講義を聴講してなんとか筆記できたのは、良順と語学の天才司馬凌海のみであった。司馬は文久二年「七新薬」(ヨードカリ、硝酸銀、酒石酸、キニーネ、サントニン、モルヒネ、肝油)を出版し、さらに「朋百氏薬論」でポンペの講義を訳述した。最初十二人だった学生は忽ち各藩からの派遣医で六十人をこえた。

三十歳近い良順や凌海でさえ精一杯の聴講である。十七歳の研海が聞き取るのは無理というものだ。赤松則良の手記によれば、士官たちの私室(紅毛部屋)や日本人通辞の控所で講義の内容を教えて貰い、ついて行くのがようやくの状態

である。

一八五八年、米艦ミシシッピー号から感染したコレラ、チフスや天然痘、五九年再びコレラの猛威、ポンペは渾身の努力でこれらの治療と予防をおしえた。生まものの食を戒めキニーネを投薬、衛生面をきびしく取締った。彼自身も感染したが、駕籠で町中を巡回したのである。誠実で正義感に充ちた青年は、医学者の使命や、売春などを許している社会についても示唆した。

日本人は解剖や実験については熱心だが、衛生については関心を示さなかった。ポンペが衣食住や運動の大切なこと、下水や肥溜やゴミ処理などの衛生観念について実地に教えた意義は大きい。病人食・温泉療法をはじめ健康を保つことの重要性に気付かせ、五年間に一万三千の病人に施した治療と投薬をカルテにして残すことを教えた。受講生は医師が多く、彼らは毒薬に強い興味を示し微量を特別な用法で投薬する。ポンペは日本人の毒薬使用は結果的にホメオパチーの状況を呈しているようだ⁸⁾と記している。

文久二年壬戌政府大ニ海事ヲ拡張セントスル折柄、蒸気軍艦三隻ヲ米国政府ニ注文シ且ツ留学生ヲモ遣スヘキ筈ナリシカ適同国南北戦争ニテ其需ニ応セス(海軍歴史二十三、勝海舟)

今般改テ右軍艦和蘭国政府之御詔相成依テ役々ノ者モ同国ヘ可相越候(旧幕府)

オランダ行き留学生について、文久二年(一八六二)三月十三日軍艦操練所で改めて命令が申し渡された。オランダ行「御軍艦方」伝習人の一行、(水夫、職方も入れると十六人)は、最初から災難つゞきで、長崎で何人かが麻疹にかゝり、長崎養生所とポンペの世話にならねばならない始末だった。医学班の伊東玄伯と林研海は治療に専念した。ポンペは五年間日本滞在のあと、ヤコブ・エン・アンナ号で一八六二年九月十日に長崎を離れたが、教え子たち伝習生は翌十一日にカリブソ号で出帆した。

一行は座礁遭難したりセントヘレナ島に上陸したり、九ヶ月を費やして一八六三年六月（文久三・四月）ヘルフト・フライス着、ライデンとハーグに下宿する。⁹⁾ 研海は度々ポンペ宅を訪問、ポンペの世話でスパイストラート75に住む。（現在は近代的な商店になっている。）

（一）

ハーグとライデンを歩いて、留学生職方が一ヶ所に集められるのでなく相当広範囲に住んだことを知った。

ポンペは研海を自分の邸近くに下宿させ、学問の他に近代生活、紳士の教養を身につけさせようと努めている。当時ポンペは第一回赤十字社の委員長で今もデ・ウィットクラブや赤十字社には、ポンペの名がプレートに記され、上流社会に出入りした一流人であったことがわかる。政治家や軍人にも紹介し、夜会やお茶の会にも伴った。ハーグの森での音楽会や海辺の散策は、とりわけ一同をよろこばせた。森には池や川や貴族の館がある。

長崎で、ポンペは松本良順から「海水浴」について質問されたことがある。良順は林洞海の訳述した「ワットル竈篤児薬性論」の九巻と二十一巻で（ブラツへの校補を加え）健康保持に海水浴の効用を説いた條について「少しく記憶しており閑話の時ポンペに質問指摘した」。この項の説明にスフェヴェニンゲンの海水浴場が挙げられている。研海らは早速馬車で出かけ、スフェヴェニンゲンの海で海水浴をこころみた。

父洞海が「北緯六十度、北海ノ海潮ヲ分析ス。入歇仁硬ノ海水ハ塩酸ソーダ・塩酸加爾基・塩酸麻僣涅矢亜・硫酸麻僣涅矢亜・炭酸加爾基ヲ含蓄スト言ヘリ」と記した所で、研海はその地へまさに来たという感動があった。「腺病質には温水浴がよく、水尿管の機能低下や水腫病に効あり」等々と記され、巻二十一付録には「鉱泉・浴場」の目次の中に「海水」の項があり、海岸での遊浴はヒフを強くし、神経痛・癩癩・子宮病・神経頭痛・舞踏病・間歇熱・麻痺・依剝昆埵児・慢性癩麻質斯痛風に効ありとされている。¹⁾



写真 1 1865年のスフェヴェニンゲン海水浴場

ドイツの保養地バーデンバーデンと並んで、北海にのぞむスフェーヴェニンゲンは、貴族の保養地としてすでに知られ、ウィルヘルム三世、ナポレオン三世、英貴族が忍んで訪れた。白い砂が砂丘を形作り、緑が色どり、遊歩道が続く。海の家やレストラン、カフェ、貝やエビを売る店が続く。研海は六・七・八月と海辺を訪れ、赤松はビールを飲みサクランボをつまんだと手帖に記している。筆者も度々泊ったが海の家は今、クア・ハウスになっている。美しい風景は石版画やスケッチ、写真に、ゼーバットワーゲン (zeepad wagen) と呼ぶテントや馬車で人々が水辺に入る情景が残っている。ヨーロッパで、「レジャー」の観念が流布しているのを研海は見た。のちに良順は日本人に海水浴をすすめる、日本では大磯が水浴地の条件を具備していると説き団十郎をモデルにして宣伝した。

幕府からの潤沢な手当金のおかげで、一同は見学、実験に時を費し、カッテンダイーク海相の夜会にも出席するなど有意義に生活をエンジョイしていた。新聞スタッツ・クーラントやアムステルダム¹⁰の英字新聞を読むことで、簡単な記事ながら、下関で長州が英・米・仏・オランダ艦隊を砲撃したことを知る。

幕府は攘夷の詔勅を遵奉する方針をとり、將軍は天皇に攘夷実行を約束した。孝明天皇が攘夷祈願のため賀茂上下社に行幸、世は急テンポで幕府の終末へと流れていく。さらに下関での事件や、前年の生麦事件の後遺によるイギリスと薩摩との険悪な状況は開戦を免れぬところまできていた。十四代將軍が大坂へ軍を進め、良順も供奉した。こうした状況をオランダに知らせる一方、江戸では六月に西の丸が炎上、將軍不在の大奥も多難で、洞海は和宮や天璋院らを守って吹上に避難させ、コレラや麻疹の対策と応急手当の小冊子を作り老中に提出するなど息つくひまもない。

(三)

オランダへは一八六四年の正月（文久四年）操練所からの手紙がフランスへ横浜鎖港談判使節の派遣を知らせてきた。その池田筑後守一行がマルセイユに着いたのは四月、一行中に研海母つるの従弟山内六三郎や、その義兄横山敬一がいた。定役横山は黄熱病にかかり、急遽ハーグの研海が呼びよせられた。外国奉行支配組頭布衣の田辺太一からの要請である。研海は一族の一大事とあつてパリへ急ぎ、マルセイユで横山の死を確認した。一八六四年四月二十九日（元治元年三月）葬儀のあとも、研海はパリで他の随員の病を治療していた。

一月たつても戻らぬ研海に、たまりかねたポンペが抗議の手紙をよこすことになる。一八六四年五月二十六日付「研海足下に呈す」と題して遺されている一文である。

要約すると、君の学業の為に甚だ好ましくない。修業中にハーグから脱れ出すなど、もつてのほかだ。学業が進まず退くことになる。君が戻らないなら授業は伊東と先に進める。使節の中に他の病者があるとしても、君の学術はまだ未熟であり、これを治療するのは危険、患者を損う怖れありと長文でさとしてている。

ポンペの手紙を見た田辺太一は、急ぎ弁明の書を寄せた。

以書簡申入候。過日林研海君江差贈し書簡之趣、同人より委曲使節江申述其意を了せり、学科修業中最も惜陰之折柄当表江迎えしは我使節一行之内病に罹れるものありて己に不起に及ひしものも有之事情無余儀事に而当人勉勵之日を敢而遊意に消せしは非ず、帰府就学之望み切なるといへど亦病者の見捨難きありて是迄滞留せしめし処病者も追々快方に赴候間帰府せしめたり。此段不悪諒察有之度尤猶宿疾之もの有之、右治療方に付委曲は研海君より口陳可被及候間厚く被差合候様頼入候右使節之命に依而申入候。謹言

文久四年甲子四月廿九日

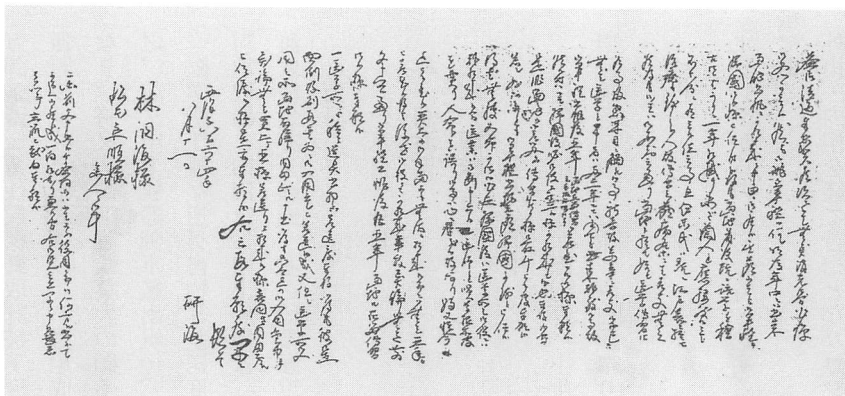


写真 2 林研海の手紙 (洞海, 良順あて)

田辺太一 花押

六月四日研海は急ぎハーグに戻り、おくれた課業を挽回し、ニユーウエ・
 デイブ (Nieuwe Diep) の海軍病院へ研修生として行くことをきめた。榎
 本と赤松は観戦武官に誘われて交戦中のデンマークシュレスヴィヒへ行き、
 クルップ社で銃砲を購入するなど活躍している。

日本では年号が慶応と改元され、開陽丸は竜骨据から一年、造船工事は着々
 と進んでいた。この年のうちに西周と津田の学者班は帰国が内定した。

ポンペがパリへよこした手紙で深く期するところがあつた研海は、帰国を
 延期するときめ、一八六四年八月、父洞海と叔父良順あてに書簡を記した。

これは近年公表されたものである。

益御清適奉恐賀候。次ニ小生無異消光候間、乍憚御安心可被下候、然御
 詔軍艦ハ何レ明後年中ニハ出来、当地出帆ニ可相成候由ニ御座候。其節ハ
 小生も御軍艦ニテ帰國仕候様被仰付候得共、当地着後既ニ語学を稽古仕候
 はかりに一年相掛り、未だ蘭人応致役ニモ不十分に有之候位之事、且伊
 東氏ハ既ニ江戸表ニ於て治療も致候人故、傳習之節病名等二者差支無之候
 得共、小生ハ御承知之通り当地に於て始て医学伝習仕候事故、惣て耳目に
 觸れ候事新奇故萬事に差支候而已ニハ無之、医学と申者ハ兩三年にてハト
 ても習束難致候事故、御軍艦出帆後五年(当地在留伝習
 之年正味字リ)御差置被下候様奉願
 候、然ル時ハ小生帰國後必御役に相立候様罷成候と乍恐存奉候間、是非当

方御差留伝習仕候様御取計被下度奉願候。若シ如何様とも御軍艦出帆の節帰國可致と被仰候得ば無據処命可仕候以上帰國後は医学所之御役ニハ難相成候間医業ハ御断申上候。医師と唱へ草根木皮を売り人命を誤り候事ハ心ニ辱知候故なり。將又迄被下置候莫大の御手当等も無報ニ相成候而已ニ無之五年と被差置候得バ後世御役ニも可相成事故異論無之、前文申上候通御軍艦出帆後、丸五年当地に在留伝習仕候様奉願候。

一医学所江種々道具書物等差送度奉存候得共、彼是面倒故別段其為ニ御入用金被差送候哉、又但シ医学所ニ入用之品、当地取締ノ内田氏に申出候得ば、只今迄の御入用金中ニテ異論無之買上ケ直様送りニ相成候様、表向き内田殿に被仰渡候様是亦奉願候、右之段奉願度。早々頓首

西曆

八月十一日

研海

林 洞海様

松本 順様

参人々御中

二白前文申上候ケ條向等ハ小生等の役目ニ而ハ何方に出候てよろしく御座候哉。一向相分り兼候間、右御覧の上早々申是趣意を似て立派ニ献白願奉り候。

(四)

オランダからの秘密報告と題する一書がここにある。パーマストン英首相の死を知って、日本に知らせ注意を促す手紙である。

外相・内相を経て首相となりロシヤ・フランスの東方進出を阻止する方針をとったパーマストンが死去したのは一八

六五年。はじめて海外に住んで、列強の力関係を身近に感じた留学生が、以後イギリスの外交方針が一変することを憂えたものようだ。

随所にオランダ語を用い、宛先の人物がオランダ語をよくし外交通であることを想定している。書き手が誰であるかは推理の域を出ないが、この書類を発見した時、まだ国会図書館の憲政資料室に出ておられた大久保利謙先生に見せた。この密書が発信人の思う方へ届かず、わたしの祖父(大久保利通)などの参考にされたのだから、歴史は面白いですねと先生は青年のように哄笑された。

当地ニ^秘「ヘイメレイキ^密」ノ報告アリ。我邦ノ為ニ甚憂ウ可キ処ナレトモ、果シテ其策ノ行ハルハ哉否ヲ不知。子細ハ英國ノ「フレミエール^席」ミニストル「ハルメルストン」十二月中ト死去ス。是ハ有名ノ宰相ニテ近來英國ノ政治凡テ穩ニ相成漫ニ他邦ニ對シ千戈ヲ動スコトヲ好マス終始佛國ト相表裏シ歐地ノ静謐ヲ本トナシタルハ此人ノ功也。然ル處此宰相ノ死ニ付テ今迄「ホレーンマツヘール」ノ宰相ナリシ「イールルーリエツセル^上」フレミエール^席ト成レリ。然ルニ此「フレミエール」ノ変リニテ内外共「ホリチキ^{政治形成}」ノ変ヲ起スハ万国ノ同シキ處ニシテ、支那日本モ同様也。然ナガラ、英ノ如キ「コンスナチユオナル」ノ国ニテハ、内治ノ頓ニ變スヘキ理ナキハ更ナリトイヘドモ、外政即チ「チプロマチーキ^{外国交際}」ノ「ウエフ^席」ノ變リハ測リ難キ処、之然ル処、此「リュツセル」ト云人ハ老年ニテ久シク英ノ宰相タレトモ元來ノ習氣ヲ備ヘタリト云。依テ今歐地無度ノ折カラ地ノ「ウエーレルトテール^{歐地之外}」ヘ羽ヲ廣ゲント云私心アリト見ユ。右ニ付今日本在留ノ英國「ミニストル」「ハレク」成ル者ハ、其「リュツセルク」手先ニテ兼テ支那ニ於テ「チプロマチーキ」ニ相関セル人ト聞ク。此人「リュツセル」ト心ヲ合テ日本ノ「ホリチーキ^政」「ニシフ^{尽力}」ヲ「ヘムーエニ^{勞心}」セント欲スル様子也。其一証ハ日本ノ「セーテ^續」ノコトニ付色々此人ノ骨折ニテ政府ノ「ヒントルハール」ヲ開タリト新聞紙ニアルハ是ナリ。然ル処「イールルリュツセル」此度「フレミエール」トナリ愈此策ヲ遂ント欲シ英國ヨリ秘使「イ

リエム」某ト申者ヲ穀シ、魯国へ遣シタリト聞。其子細ハ日本ノ交易鬼角業々シカラス。比上荏再打捨置寸ハ何時ニ歐人「フレイ」^{自在}「ハントルトレーヘン」^交セニモ計リ難シ故ニ条約ヲ新ニ仕更へ「ノフーマールレハーヘン」^{数多之港}ヲ開カン。夫ニ付色々ト政府ノ落度タル処ヲ取り難題ヲ申出サント也。万一日本ニテ聞キ入ザル寸ハ千戈ニ及ベシ。左スレバ長人ノ一件ニテ日本ノ毛並モ分リタレバ償金ノ外策アルマジト云ヘリ。然ル処魯ニテハ肯セス魯ハ元來歐諸国ト相及シタル「ホリチーキ」成シハナリ。魯ノ云フハ我国ニテハ本ヨリ交易ヲ盛ニスル意ナシ、只日本ト相親知スレハ未迄ニテ可也何モ比ト「ウェール」^慕トノ策ヲ似テ交易ヲ盛ニスル意ナシト見タリト云。其後右英使李滿生ニ至リ其説ヲ逃シ処是モ聳曼ハ今盛ンニ日本ト交易スル程ノ見込ニモ非ス。又戦争ニ及タル寸遺スヘキ戦艦モ多分ハナケレハ右策ニ同セスト断リタリ。

(以下略)

一八六五年(慶応元年)五月付で、研海と伊東玄伯は操練所あてに留学延期願いを提出した。研海の胸には長崎時代の先輩であり操練所教官でもある矢田堀景蔵(鴻)の顔が去来した。さらに彼と親しい伝習所一期生勝海舟を頼みの綱と考えていたろう。開陽丸に装着する大砲の入手に駆け廻っている赤松の場合は、内田や榎本から軍艦奉行伊沢謹吾にあてて帰国延期を強く進言してもらっていたのである。日蘭学会編纂による学習関係資料雑纂の中に、研海と玄伯連名の願い書があるが、それには「今二三年も引残学習仕候方可然旨、学師[○]よりも申し立て」の記述がある。「学師[○]申立之通引残留る之義奉願候」と重ねてポンペが学業不充分を申立てたことを強調して挙げたのだった。

軍艦奉行署名の滞在延期を許可する書簡が到着したのは開陽丸出港の直前であった。研海はデン・ヘルダー近くのニユーウェ・ディーブ海軍病院(Marine Hospital)で本格的に軍陣医学を学びとる日課に入った。

(五)

フランス政府は慶応元年六月から、二年後のパリ万博に日本からも参加するよう勧誘していたが、当時幕府はフランスと親密な関係にあり、参加出品を約束し諸藩にも商家にも展示出品を命じたが清水印三郎のような篤志家のほかは気乗り薄で、従来対立した二大勢力薩長両藩が幕府と対決すべく薩長同盟をむすび、將軍家茂自らが征長軍を大阪に進めるといふ未曾有の切迫状態となり、先が見えない日々であった。江戸時代を通じて最も一揆や打ちこわしの多発した時期でもあり、ええじゃないか御札降りお陰参り等、民衆の混乱も極に達していた。

慶応二年の夏、將軍家茂が急死のあと水戸の慶喜が十五代將軍を継承、フランスは新將軍と親善を深めたく、弟君をパリへ派遣されたいと要請した。

慶喜は昭武に、徳川民部大輔として將軍代理でパリの万国博に参加し、フランスの皇帝ナポレオン三世に謁見し、列国皇帝と会い、博覧会を展覧して西洋文化文明を学び、その後は条約国を廻って見聞をひろめて来るがよいと快く送り出した。

フランスへの国書は慶喜自身を書き、弟はまだ年少で諸事不慣れのこと故、よろしく御教示下さい。お国の典礼が終了して後も、パリに留めて学ばせたい所存であるから、ぜひ教育あられ度と書き添えた。

使節団としては向山隼人正・山高石見守らのほか、研海と以前かかわりのある田辺太一が外国奉行支配組頭となって来ているし、その下に従兄の山内六三郎や、奥詰医師高松凌雲も、縁続きの箕作貞一郎も従っている。

知らせを受けて、研海は勇んでパリへ向かった。四月十八日北駅には山内が公子用馬車で迎えに出ていて、研海・伊東・赤松を昭武の宿舎に伴った。随員宿舎には山内六三郎・渋沢栄一・高松凌雲のほか松本銈太郎（良順次男）、緒方洪斎（惟準、洪庵次男）らがいて再会をよろこび寢食をとともに一夜を語りあかした。（渋沢栄一「航西日記」）

シャン・ド・マルスのパビリオンにナポレオン三世が展開する鉄と銅、電気と蒸気の展示に目を奪われ、帝国主義なるものの実体を見せつけられて、研海の興奮は容易におさまらなかった。（『五大洲巡行記』山内六三郎）

その後、昭武一行はオランダ・ドイツ・イギリスを歴訪、ライデンではシーボルトの別荘やニューエーディーブの海軍病院をも訪れた。研海と玄伯は公子一行を案内し、国境まで見送った。やがて年が明け、一同は祖国の大政奉還、鳥羽伏見の戦いを知ることになる。

幕府がいよ／＼崩壊し、学費や生活費の送金が途えると帰国は時間の問題であった。四月二十四日パリに集合した研海たちはロンドン留学を諦めた林董や松本銚太郎、ユトレヒト大学にいた緒方洪斎らと共にフランス郵船でスエズ經由日本をめざした。

五月十五日幕軍彰義隊がアームストロング砲で撃滅され、上野の山にまだ砲煙の匂いが残っている頃、研海や董は横浜に到着した。研海は駿府に移って家達（田安）に仕えている。女たちは薬研堀に残っていた。董は横浜の山内六三郎方（翻訳方官舎）にいる泰然夫妻の所へ帰国の挨拶をして、薬研堀の洞海方へ行き、そこで多津の夫となった榎本武揚から話を聞いた。即座に榎本の輩下になることを乞い、泰然に許しを得て、品川沖の開陽丸に乗り込んで士官になった。

医学所の頭取となり、將軍の脈をとる身になっても、松本良順は全く地位権力にこだわるところはなかった。親しい友人たちが徳川のために命を投げ出すなら自分も医師として従うという。良順は磊落で豪放な気風を近藤勇にも慕われた。時に乞われて壬生の新選組屯所を見て歩き、隊士たちの不潔さを指摘、衛生と健康法まで助言し、牛豚肉・牛乳を飲むこと、入浴とゴミや便所の管理などを近藤勇・土方歳三らに教えこむ始末であった。

討幕の密勅、大政奉還、京で鳥羽伏見の戦火敗走とたて続けの報道で、傷ついた幕臣が運ばれてきて、医学館と医学所が使われた。狭い医学館は収容数が限られ、洞海と玄朴が中心となって医学所の全座敷を工面して立ち働いた。その治療は、医学館の医師でなく医学所の医師が行うべきことと指令されたから、外科治療の面で漢方医は排除され、西洋

医が主であることを標榜した形となった。¹⁴⁾

洞海の長女多津は榎本武揚と、次女ていは赤松則良と彼らのオランダ帰国後すぐ慌しく挙式した。いずれも研海の指示で洞海が世話をした。榎本は開陽丸で函館へ脱走、最後まで抗戦するが、大坂城を引揚げる折の金からオランダにいる研海の帰国費を算段して送ることを忘れなかった。

(一六)

江戸城開け渡しのと洞海は徳川家に従って、沼津藩重立取扱となる。その後東京に招かれて大学中博士、明治三年権大典医皇后付となる。誠実で剛毅な洞海は、泰然一家とも佐倉藩士ともおだやかに交っていた。佐倉藩成徳書院学問奉行金井右膳や佐治右衛門、また、長崎在住の林熊十郎などの往復書簡は細やかな心づかいを見せている。生涯の兄弟子で義父である佐藤泰然との関係から、洞海は佐倉藩江戸屋敷のお傭いとして合力の処遇を受けていた。この扶持は明治二年まで続いた(佐倉藩史藻)。洞海が娘多津にあてた手紙の中には「今の世はどこに居て何に会うかわからぬ故、すべて天命と心得ている」と書かれてあった。

ようやく帰国して静岡病院頭となった息子研海は、その後新政府の陸軍々医正に任命され、明治六年オランダ領事下

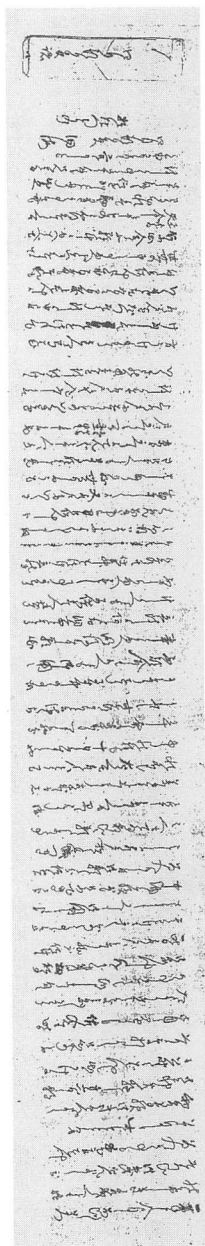


写真 3 本洞海の手紙 (榎本多津あて)

のオランダ軍野戦病院で疫病とたたかい、オランダ国王の賞牌を受けた。矢田堀鴻の妹みほを貰う噂だったが、白倉氏の次女絲と結婚して若吉ワカキが生まれた。

筆者は『ヘボンの生涯』を書く時、泰然とヘボン、林董らの動向を調べた。泰然が横浜に隠居したのは、老中堀田正睦に開国路線の助言をした故との見方もある。洞海は泰然五男董を養子として大切に養育すべくロンドンに留学させたが瓦解で帰国するとすぐ、董は会津に籠城する実兄良順や榎本武揚の影響が大きく、榎本軍に参加して戦った泰然と洞海は董・良順・娘聳の榎本・山内の甥たちの身を案じつつも志のままに進めと励ました。

泰然はヘボンやシモンズらと外科手術の話を交し、学問はもはやオランダではなく、英米あるいはドイツの時代だろうと感じていた。医学の傾向を先読みし、尚中・良順・進・銚太郎・百太郎からの手紙を研究して、世界に通じるのは英語だと言っている。

(七)

明治政府に出仕して後の研海については紙数の関係で稿を改めねばならない。明治元年（一八六八）横浜に到着した研海は、駿府に行き病院頭として医療と衛生の両面で活躍を始める。妹の夫となった榎本、弟の林董は五稜廓で戦い捕えられた。泰然は「彼らは箱館に居るよ」と平然言い放っていた。新政府は、オランダで軍医の教育と経験を積んだ人材として林研海に出仕を要請したが、研海は旧主徳川家に随行する方策を採って駿府病院長となった。駿府には沼津兵学校があり矢田堀鴻が校長格、赤松も西周も教授に招かれている。

叔父良順が晴天白日の身となり、兵部卿から軍医頭を命じられるや、研海を呼んで軍医次官とし、緒方惟準洪を一等軍医正に任じた。兵部省は陸軍を山県有朋が握っているが、良順の無私の生き方は山県にも愛されて、軍陣の面に力を貸せと要望される。

研海は明治六年、オランダとスマトラ島亜丁国との紛争にオランダ軍野戦病院へ派遣された折、伝染病と脚気に注目、官命で悪条件のもと脚気が双方を悩まし自らも罹病したが、メイエルの「脚気論」を翻訳して江戸時代の一大国民病に注意を促した。父洞海が安政五年臨終に急召された十三代將軍も、叔父良順が大坂城で同じ寢床に入つて看病したという十四代將軍も、脚気で二十一歳と思えぬほど脚が腫れ、心労過勞で急死したのであった。それらの臨床体験を父や叔父から聞いている研海は、脚気という病気の恐ろしさや対策を書物にしておきたかった。当時はまだ、脚気を軽視する風潮が強かったのである。

明治十年、西南戦争が起こると研海は軍医部長として野戦病院へ派遣され、傷病兵の治療にあたった。雨と泥の戦場に疫病が流行し、衛生面の指導にも力を入れねばならなかった。その後、勲三等軍医総監に進む。

研海訳述の処方学の一部を（マイクロフィルムが不鮮明だが）次に紹介する。

「処方学」

溶剤ハ一箇式ハ数箇ノ固形物ヲ水液中ニ溶解スル者ナリ。其溶解セラルル固形物ヲ「ソルヘエンジウム」ト名ツケ、之ヲ溶解スル水液ヲ「ソルヘンス」或ハ「タンストリウム」ト稱ス。内服薬ノ「ソルヘンス」ハ、水ヲ用井ルヲ常トス。或ハ「アルコール」「エーテル」ヲ用ス。外用ニハ多クハ脂性油ヲ用ユ、水ハ塩類、粘滑物、石鹼及ビ水製「エキス」エキス溶液ハ少シク
潤滑スルヲ常トスヲ溶解ス。「アルコール」ハ「ハルツ、龍腦及ビ数種ノ塩ヲ溶解ス」「エーテル」及ヒ脂性油ハ龍腦。燐素

及ヒ鯨腦油オ溶解ス「ホロールホルム」ヲ「ソルヘンス」ニ用井ル○アリヌ。近来「グリセリーヌ」ヲ用ユ。
定量ノ水ニ薬品ヲ溶解スル度ハ、各品皆異ナリ。是レ醫家必ズ
記憶スベキ者ナリ左表ハ攝氏ノ十度乃至二十度ノ水三十瓦蘭中ニ各薬ノ溶解

スル度ヲ記載スル者ナリ。

亜比較 安息香 酒石けん

ホロール

硫酸亜鉛

ソルンス

処方 硝酸銀

純「ヨヂューム」

沃度加里

溶剤ヲ屢滴用スル○アリ、或ハ點眼水。洗済咽雷劑注射劑トシテ用ユ溶剤ハ、蒸餾水ヲ最モ良トス。

……「エキス」類ヲ溶解スルニハ雨水ヲ用井テ可ナリ。

常水泉水

○麻酔劑式ハ、有毒「アルカロイーデ」「ステルキニーノ」ハ、意ヲ用ヒテ溶解スヘシ。如キ者

沈殿してこれを服用すれば、患者が中毒を起すかも。

制酸劑ハ酸類ヲ炭酸「アルカリ」ニ和スルガ為ニ分析力ヲ發起シ、酸ハ「アルカリ」ト親和シテ炭酸ヲ游離セシムル薬剤ナリ。酸ノ分量ハ薬剤家ノ一陋好ニ任ス。制酸劑ニ多く用井ル酸ハ枸橼酸ナリ。枸橼汁或ハ結晶枸橼酸 近來多く結晶枸橼酸ヲ

用井ル所以ハ、用井ル毎ニ新鮮ノ枸橼汁ヲ取ル井ハ時間ヲ費スコト多くシテ且ツ共汁ヲ貯ヘ難キカ故ナリ。炭酸「アルカリ」ハ多く炭酸加里ヲ用ユ。此他制酸劑ニ用井ル酸ハ醋。酒石酸ナリ。炭酸「アルカリ」ハ重炭酸曹達。一半炭酸「アンモニア」稀ニハ炭酸加里兩其、或ハ炭酸麻痺渥失亜ヲ用ユ。

新鮮植物液ハ新鮮ノ蒲公英。山慈菜、碎米薺、白屈菜、睡菜「ベカビュンゲ」薯草等ヲ以テ春間製スル。榨汁ニシテ謂五月飲劑トシテ往昔多く春間治療ニ用井シ者ナリ。○之用井ルニハ日々一日ノ量ヲ処シテ一月ニ至ルベシ。

処方 左藥ノ新鮮榨汁

山慈菜

碎米著

「ベカビュンガ」葉

日本が明治政府の力で近代化されてからも、ポンペは研海を忘れなかった。明治四年（一八七二）の岩倉使節団が米英ヨーロッパを巡歴したとき、アムステルダムとロッテルダムの新聞は、ポンペとホフマンが日本の使節団をハーグ・ライデンに案内し歓迎したと報じている。明治七年榎本式揚が特命全權大使としてペテルブルグに着任した時、ポンペは岩倉と榎本の望みで外交顧問・囑託医となり、妻子とともに赴任している。

さらに森鷗外の「独逸日記」によれば一八八七年、国際赤十字会議が開催されたカルルスルーエで、ポンペオランダ代表が話しかけてきて、松本良順や林研海の近況を尋ねたという。ポンペは二十五歳の森をみて、林研海に似ているといい「紀は女性問題で大変だった。わたしが Deuc ex Machina（ギリシャ劇中いざこざを解決する神）を演じたのだ」と阿羅漢のような顔で笑った。

この頃、オランダ医学はドイツ医学にとって変られていた感がある。洞海・研海ともにオランダ医学一筋に歩んできたが、後に続く者がいない。泰然は尚中が長崎へ学びに行く時さえ、ポンペ師事は良順だけで結構という態度がみえた。尚中がプロシヤの船医たちと話して、日本の蘭方は古いと感じた報告の手紙、オランダで学んだあとドイツへ転じた銚太郎の話、尚中の子の進がドイツ留学しての書簡の数々、泰然の一族でも良順・研海を下限としてオランダ医学の時代は終わったのである。

明治新政府の時代、ドイツ帝国が国力をさかんにし医学も進み、相良知安が大学東校にドイツ医学を導入し、オランダ医はドイツの書を訳していると唱えた。大学東校のフルベッキは（アメリカに帰化したオランダ人だが）今医学教育はドイツに頼るべきでしょうと相良たちに同調したのであった。



写真 4 揚州周延描く錦絵。
右から良順・尚中・研海

ポンペは言う。「わたしが日本で鋭意努めたことは、今や歴史上の価値を持つに過ぎなくなりました。」と。

研海は明治十五年ロシア皇帝アレキサンダー三世の戴冠式に参列される有栖川宮に随行した。イタリアで勲章を受けてパリに着いた七月二十五日腎臓炎で倒れ肺炎を併発、八月三十日思い出深いパリで波瀾の人生を閉じた。数え年で三十九歳であった。大書記官として同行していた林董らによってモンパルナス墓地に埋葬、翌年明治十六年一月十八日フランス政府が将官に対する礼をもって公式に葬儀を行った。儀仗兵と弔銃の発射、軍楽隊による葬送曲が演奏された。井田駐仏大使とフランス駐在武官が枢の綱を持ち勲章を捧げたが、親族は弟の董のみであった。

著者はモンパルナス近くに住んでいた頃、墓参を果たした。事務所で墓所を探し閲覧して、枯れ苔の黒い堆積物を洗い流すと、鉛色の石に林紀之墓、台石に TSUNA HAYASHI と彫られた字があらわれた。

遺髪は谷中の天王寺、祖父泰然のおくつき近くに埋葬された。脇に植えた一本の松が今は大木となっている。

泰然命日には佐藤、榎本、赤松、林の一族が集まる。

谷中の墓の銘は中村正直撰となっている。林董の英国留学以来の師であり、墓碑の字は妻の父白倉清静が書いた。良順や洞海の豊かな人脈を思わせる人々、山県有朋や井上馨などの名がみえる。晩年の良順は愛生館を通じて上流貴顕と交わり、山内家の薬店日本橋の資生堂の援助もした。揚州周延の引札は売薬のポスターといったところで佐藤尚中を中心にして軍医総監の軍服で良順と研海が描かれている(写真4)。

おわりに

長年にわたって貴重な史料を寄せられた方々、佐藤強・佐倉順天堂院長、榎本武揚・隆充、松平乘昌、フオス教授一家、林欣二夫妻、赤松照彦・秀子の諸氏、また大滝紀雄・酒井シヅ・深瀬泰旦諸先生はじめ順天堂医史学会の皆さんに深く感謝申し上げます。小稿のため佐藤強・深瀬先生からは特に懇篤な御教示をいただきました。さらに今後も探索を続けねばならないし次なる課題が山積している。林若吉氏によれば洞海のもとには何百通もの書簡があつた。泰然が患者の診察と投薬を依頼したものの(佐倉か横浜で受診し、江戸へ移った患者か)など珍しいし、散佚を免れたものを調べれば洞海の生き方が見えてくると期待している。すぐれた外科医で荒馬の去勢を手早く何頭も行ったという噂もあるし、文久三年から元治の嵐のような年月にも、人から何か頼まれると長崎へ頼んで調達したり、穏やかな手紙が残っている。

幼い孫の若吉をつれて、榎本邸や赤松邸に行く洞研海の姿が毎年見られた。欣二氏がなくなり、林家は若吉氏の文学面資料ばかりを遺されたが、血筋の方々の間からさらに資料が出のを願ひ、お教えを乞う次第である。

注

- (1) 順天堂『順天堂史』上、五二頁・四六三頁
- (2) 深瀬泰旦『天然痘根絶史 近代医学勃興期の人びと』二八・二九頁、思文閣出版、京都、二〇〇二年
- (3) 伊東栄『伊東玄朴伝』、玄文社、東京、大正五年
- (4) 深瀬泰旦 前掲書、三三頁
- (5) 緒方洪庵『勤仕向日記』文久三年八月、緒方富雄『緒方洪庵伝』岩波書店、東京、一九七七
- (6) 伊東栄 前掲書、一三一頁
- (7) 須藤由蔵編『藤岡屋日記』文久元年、近世庶民生活史料、東京、三一書房

- (8) 沼田次郎・荒瀬進『ボンペ日本滞在看聞記』二七三—二九五頁、雄松堂、東京、昭和四三年、「ボンペ顕彰記念会誌」、一〇一—一〇三頁、ボンペ顕彰記念会、東京、一九九一
- (9) 宮永孝『幕末オランダ留學生の研究』一四五頁、日本経済評論社、東京、一九九〇
- (10) アラン・コルバン『浜辺の誕生』、九一—一〇二頁、藤原書店、東京、一九九二
- (11) 沼倉延幸『窠篤児葉性論にみえる海水浴について』四三—四七頁。洋学史研究第一号、青山学院大学、昭和五九年
- (12) オランダ石版画集、一八五〇年頃
- (13) 由井正臣『後は昔の記』、一四〇頁、平凡社東洋文庫、東京、昭和四五年
- (14) 石田純郎『江戸のオランダ医』、一〇五頁、三省堂、東京、一九八八
- (15) 村上一郎『蘭医佐藤泰然 その生涯とその一族門流』一七四頁、房総郷土研究会、千葉、昭和一六年

その他の参考文献

- 『遣外使節日記纂輯』第三卷、日本史籍協会、昭和五年
- 『通信全覽』正統、雄松堂
- 大久保利謙『幕末和蘭留學生関係目録』、昭和二八年
- 『幕末和蘭留學生関係史料集成』、日蘭学会編、昭和五七年
- 『続幕末和蘭留學生関係史料集成』、日蘭学会編、昭和五九年
- 『海軍歴史』勝安房編、明治二二年
- 『海舟全集』勝部真長、勁草書房、昭和四九年
- ファン・カッテンディーケ『長崎海軍伝習所の日々』平凡社東洋文庫、昭和五四年
- 田辺太一『幕末外交談』、平凡社東洋文庫、昭和五四年
- 小川鼎三・酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専斉自伝』、平凡社東洋文庫、一九八〇年
- 赤松範一『赤松則良半生談』平凡社東洋文庫、昭和五二年

- 鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』、東京医事新誌局、一九三三年
- 宮永孝『ボンペー——日本医学の父』、筑摩書房、昭和六十年
- フォス・美彌子『オランダ領事の幕末維新』、新人物往来社、東京、昭和六三年
- 堀田正久『堀田家三代』、新潮社、東京
- 千河岸實一『近世百傑伝』、博文館、明治三十三年
- 富田仁『横須賀製鉄所のフランス医官』、仏蘭西学研究10号
- 「同方会誌」、五七号、明治三十三年
- 「旧幕府」、明治三〇—三四年
- 林若樹『林若樹集』日本書誌学体系28、昭和五八年
- 『若樹随筆』日本書誌学体系29、昭和五八年
- 宮地正人『幕末維新風雲通信』東京大学出版会、昭和五三年
- 国立中央文書館（ハーグ）マイクロフィルム
- 「アムステルダム・ライデン・ニューロッテルダム新聞」

